

補 遺

余は本誌前號及び前々號に於て、回鶻文八陽神呪經を譯出せしが其の際此の經の卷首の部は缺佚して存在せざりしなり、然るに其の後露西亞の Radloff 博士は、余が譯載せしものを一見して同國學士院所藏の回鶻文佛典中に、其の卷首の十五行及び、余が出せし分の第十八行より第七十二行に亘る部分の存せるを知り、また伯林に存せる版本の回鶻文佛典の寫眞にして、氏の手許に存せるものゝ中にも、此の經の斷片の存せるものあるを見て、此等の寫眞を一括して余に送達せられたりしが、余もまた其の後大谷氏所藏の經典中に、此の經の初めの部を補ふべき「十一行の斷片の存するを見出したりき。されば卷首の缺佚せる部分は今や此等の兩者によりて、ほゞ之を全ふするを得、其の他紙面の汚損、若しくは誤寫等によりて、先きに解し能はざりしものも新たに讀解するに至りたる所少からず、よりて更に茲に補遺を附して、前きに出せし所を補はんとす。

尙ほ附記すべきは此の經の種類なり、本經はさきに述べたるが如く元來偽經なるにも係はらず、廣く回鶻族の間に行はれたるものと見え、大谷氏所藏の中にも、堀氏の得たるものと、橘氏の得たるものとの二種あり、露西亞に存するものも Oldenburg 氏の得たるもの（ラドロフ氏の私信によれば、此の種類に屬するものは、氏が既に二十年以前に得たる所にして、回鶻佛典として氏が譯出せし最初のものなりといふ、譯文は、同國學士院報告中の Uigurische Sprachdenkmäler 中の第五十八及び第九十九に見え、前者は余が譯出せしものゝ第一百三十行一二百三十九行、第一百四十五行一二百四十八行、第一百七十七行一二百八十七行に相當し、後者は其の第一百六十行